

手洗いやうがいなどの予防が大切です

妊婦さんがリンゴ病のウイルスに感染すると、胎盤を通して胎児も感染して重い貧血を起こし、全身がむくむ「胎児水腫」の状態に陥り、流産や死産となることがあります。特に、妊娠前半期は胎児も非常に弱い状態なので注意が必要です。

リンゴ病のウイルスは、感染した人の唾液や鼻水、痰などの中に出てきて、それが咳やくしゃみのしぶきとして空気中に飛散する「飛沫感染」や、環境中に飛散したウイルスが、手や食器などを介して他の人の体内に入る「接触感染」で広がっていきます。

赤い発疹が出る前の、風邪のような症状が出ている時期が最もウイルスを排出しているので、妊婦さんは、風邪の症状がある人にできるだけ近づくことを避け、手洗いやうがい、マスク着用など、他の感染症と同じ予防を行きましょう。

2人目、3人目を妊娠中の場合、上のお子さんが気付かないうちに感染して帰ってくることもあります。必ずしも風邪のような症状が出ている

とは限りませんが、同じ食器は使わない、お子さんとスキンシップする際、

口や鼻の周辺にはキスをしない、スキンシップの後はもちろん、普段から手洗いやうがいをこまめにするなどの予防行動が重要です。このような予防行動は、妊娠中の感染を避けたいサイトメガロウイルスなど他のウイルスの予防にも有効です。お子さんばかりでなく、夫など他の同居家族が感染して帰宅することもありますから、家族全員で感染予防に努めましょう。

なお、胎児水腫の状態に陥った場合でも、胎児に対する輸血などの治療法があります。治療がうまく行けば、出産後に障害が残ることはほとんどありません。万が一、感染が判明した場合は、産婦人科の医師と相談しながらお腹の赤ちゃんの状態をよく把握することが大切です。



ワクチンの豆知識 第2回

ワクチンの種類によって免疫力が違う？

ワクチンとは、からだの「免疫機能」に病原体を覚えさせるための薬…ということ、32号で説明しました。しかし、「病原体を覚えさせるのなら2回くらいの接種でいいんじゃない？三種混合は4回も接種しなきゃいけないって聞いたけど」など、疑問に感じる方もいるかもしれません。

ワクチンには、生きていた病原体の毒性を弱めた「生ワクチン」と、殺した病原体から免疫を作るのに必要なところだけを取り出した「不活化ワクチン」があります。生ワクチンは、『毒性を弱めた』とはいえ生きていた状態の病原体を接種するので、2回くらいの接種で十分な免疫ができるのですが、その病気の軽い症状が出ることもあります。そのため、妊婦さんや、重い疾患にかかっている人などは受けられません。一方の不活化ワクチ

ンは、病気の症状が出る心配はほとんどないものの、生ワクチンほど強い免疫は生まれな

いで、何度か繰り返して接種する必要があるのです。

防ぐべき病気ごとにワクチンの種類は異なり、接種する年齢や、生ワクチンを接種した後、別のワクチンを接種するまでに空けなければならない期間などはきちんと決まっています。また、37.5℃以上の熱が出ている、ワクチン接種後に強いアレルギー症状が出た経験がある…などの場合もワクチン接種を受けられませんので、気になる時は、医師と十分に相談するようにしましょう。

